１．個人データ

職名：講師　　氏名：石井達也　　学位：博士（教育学）　　e-mail：kcct-t-ishii@g.kobe-kosen.ac.jp

２．教育・研究テーマ

（１）医学論文における典型的な定型表現の記述

English for Specific Purposes (ESP)におけるジャンル分析では、ある特定の共同体における文章構成を明らかにするためにムーブ分析が行われてきた（Coffin, 2001; Hyland, 2002)。ムーブ分析においては、共通の知識と、それを具現化する言語様式が共有されているはずであるという前提がある(Paltridge et al., 2014)。一方でコーパス言語学では、特に新 Frith 学派において、語彙と文法は切っても切り離せない関係であるという考えと共に、新たな言語分析単位として、定型表現（phraseology)という概念を発展させてきた（Hunston & Francis, 1999)。ある特定の共同体がムーブの流れと、それを具現化する言語様式を共有しているならば、そこで用いられている文章には、共通で用いられている定型表現があるはずである。しかしながら、コーパスデータを用いてムーブの流れを明確にする定型表現の記述の試みは少ない。具体的にはムーブ分析に基づく医学論文コーパスデータを作成し、ムーブの流れを明確にする定型表現の記述を行なっている。以下は導入部（Introduction）における Move 1: Presenting Background Information の用いられる定型表現の例である。

[diseases/ symptoms] (cancer/ disease/ infection/ stroke)	is	the most common cause of	death	in [place]
		the/a leading cause of	morbidity	in [persons]
		a major cause of	disability	among [persons]

（２）身体論に基づく英語指導法の開発（特に英文法）

1980 年代以降の言語学における認知言語学の台頭により、言語と身体の関係が見直されてきている。その中で、英語学習者の gesture 使用に関する研究が行われてきた。McNeill (2005)では gesture は言語の一部であると考え、Stam (2008)は gesture には思考が現れるとしている。Özyürek (2002)や Stam (2008)では、無音の映像を見せられ、その映像の内容に関して英語で説明するといった実験において、英語上位英語学習者は英語母語話者に発話(product)は近づくものの、gesture(process)は母語の影響が残ることを報告している。一方で、Matsumoto & Dobs (2017)では gesture を意図的に用いた指導を行いことで文法教授に効果があることを示している。そこで認知言語学の知見に基づく英文法の知見を教育的 gesture (pedagogical gesture)として開発することを目指している。

３．その他のデータ

（１）教育・研究技術相談可能分野

・コーパス研究に基づく特定領域の言語特徴の解析
・応用言語学
・英語教育（特にライティング）
・英語資格試験対策

（２）出前講義・公開講座，講演可能テーマ

・日英語の対比
・学習英文法の意義
・特定領域の言語特徴

（３）キーワード

・コーパス言語学、応用言語学、英語教育、pedagogical gesture